

【翻訳】

「マンチェスター大学の平和学プログラムの
歴史～過去，現在そして未来～」

(ケネス・ブラウン マンチェスター大学名誉教授, 元平和学研究所所長)

片 岡 徹

翻訳

「マンチェスター大学の平和学プログラムの歴史 ～過去、現在、そして未来～」

(ケネス・ブラウン マンチェスター大学名誉教授, 元平和学研究所所長)

片岡 徹

〔解説〕

本稿は、2010年1月21日に本学会場に行われたマンチェスター大学の名誉教授であり、元平和学研究所所長であるケネス・ブラウン先生の講演録を日本語に翻訳したものである。今回の講演は、2009年度から二か年計画で行っている北星学園大学特定研究費（プロジェクト研究）「平和学プログラムの高度化に関する調査研究」（研究代表者：萱野智篤経済学部教授）の一環として実現された講演である。当日の演題は「The History of Manchester-College Peace Studies Program: Past, Present, and Future（マンチェスター大学の平和学プログラム～過去、現在、そして未来～）」であり、本講演は英語でなされた。

1. はじめに

この度、ここ札幌市にあります北星学園大学にお招き頂いたことを、大変光栄に感じております。北星学園大学とマンチェスター大学が、BCA（Brethren College Abroad）という学生の交換留学プログラムを通じて、このように結びついていることを嬉しく思います。私が片岡先生と出会ったきっかけは、彼が北星学園大学の英文学科の学生の時に、

このBCAを通してマンチェスター大学に交換留学生として平和学を学びに来たからです。私は片岡先生を通して、日本国憲法の第9条に関して、軍縮を推し進めることこそが日本の平和への道となるということを知りました。彼の研鑽とその取り組みは、私たちマンチェスター大学にとって大いなるインスピレーションを与えてくれたことを、ここに述べておきたいと思います。

私は皆さんに、平和研究者というよりは、むしろ教育者であり、また平和のために活動してきた者としてご挨拶したいと思います。願わくは、米国で最初となる学術的な平和学プログラムがマンチェスター大学という小さなアメリカの大学で始まり（学生数は1,200人であり、シカゴから250キロも離れた人口6,000人の中西部の町にあります）、その後どのように発展されたのかについて、その経緯や歴史について述べさせて頂くことで、皆さんの平和研究への関心に訴えることが出来れば幸いです。

2. ブレズレン派という起源

北星学園大学がここ札幌市において、献身的なキリスト教の長老派の宣教師の働きから始まったように、マンチェスター大学もまた

キーワード： マンチェスター大学, 平和学プログラム, ケネス・ブラウン教授, ブレズレン教会, 絶対平和主義

非常に小さなプロテスタントの集団である、当初はタンカー派 (Tunkers) と呼ばれた集団によって設立され、今日まで育まれてきました。洗礼を受ける方法のあり様から、時折ダンカー派 (Dunkards) とも呼ばれていましたが、後にはドイツ系バプテスト・ブレズレン (German Baptist Brethren) と呼ばれるようになり、最終的に1908年以降は、Church of the Brethren (ブレズレン教会) と呼ばれるようになりました。米国では150,000人という小さな宗派 (denomination) です。ブレズレン派は米国では、クエーカー (Quakers), メノナイト派 (Mennonites) と並んで、歴史的に三つの絶対平和主義教会 (peace churches) の一つとして見なされています。ブレズレン派の起源は、中央ヨーロッパを席卷した宗教革命における16世紀のスイスにおける再洗礼派 (Anabaptists) を基盤とした17世紀の敬虔主義^{けいけん}の影響にありました。再洗礼派は、従来の宗教上の信条の多くを受け入れましたが、国家主導の教会 (state-ordained churches) を拒否し、成人洗礼 (adult baptism) を実施し、そして戦争に参加することを拒否しました。彼らは、新約聖書に書かれている通りに、イエスの教えに従う生活を強調しました。しかしながら、彼らの不調和 (nonconformity) は、政治的抑圧をもたらすことになりました。彼らはプロテスタントとカトリックの両者によって絞首刑にされ、焼かれ、打ち首にされ、そして溺死させられたのです。彼らの教育的な取り組みは、すぐに全滅させられてしまいました。なぜ彼らが戦争と暴力を好まなかったのか、私たちはいま理解することが出来ると思います。概して彼らのその後の世代は、自らの権威をキリストと彼の教えに置く質素な農業労働者でありました。

生き残った世代の人々は、幾つかの方向へ分散していきました。ある者はドイツへ向かい、そこで居住者を必要とする、より寛容な

統治者に会い、一定の宗教的自由を認められた者もいました。個人の精神性を活性化させることを試みるルター派教会や改革派教会を設立した17世紀の敬虔主義運動に影響されて、現在は南西ドイツにある場所で、1708年に8人のある小さな集団による聖書研究や他者への奉仕を行い、自らをキリスト教の信者でありその共同体にいることを決心させたのであります。

聖書を将来の予測として読むことも出来ると思います。ブレズレン派は新約聖書の観点から旧約聖書を判断し、またいかにそのことが福音書で見られるイエス・キリストの教えと人生に倣っているのか、という観点で新約聖書の記述を判断していました。タンカー派は決して新約聖書以上のことは書き記さなかったし、信条を表明することはありませんでした。彼らの連祷 (litany) はマタイの福音書の第5章から第7章であり、山上での説教 (the Sermon on the Mount) でした。ここでは、親切心と愛を大切に生きることが強調されており、“Thy kingdom come, on earth as it is in heaven”と神への祈りにおいて祈願される通りでした。再洗礼派はキリストの教えに従うべきであることを受け入れ、そのことは他人を殺すよりも敵さえを愛せよということの意味していました (ブレズレン派の人びとの中には車のバンパーの部分で「イエスキリストが、私たちが敵を愛せよと言った時、彼はおそらくは私たちは彼らを殺すべきではないということの意味したのだ (When Jesus said we should love our enemies he probably meant we shouldn't kill them.)」と主張する人もいます)。18世紀までには、絶対平和主義者であるドイツ人のブレズレン派の人びとは、もはや処刑に直面することはなくなりましたが、しかしながら投獄や課税 (jailing or taxation) というような形式で苦しめられました。彼らの対応の仕方は、祖先たちと同様でした。改宗するより

はむしろ彼らは前へと歩みを進め、最初の地としてドイツのクレーフェルト（Krefeld）に着きました。その後、新世界において居住地を引き継いだクエーカーであるウィリアム・ペンの導きにより、1719年に第一団として全員が二つの集団で米国へと海を越えて、残りは10年後に移住してきたのでした。ペンシルベニアの地において宗教的な自由が約束されたために、交戦的領地といういわゆる古い戦争（the Old War）から永遠に離れることが出来たのでした。ペンシルベニアはまさに奇跡と呼ぶことが出来る場でありました。絶対平和主義者を好意的に迎え入れてくれました。政府という存在は、暴力によって誕生し、そして是認されていました。政治的現実主義者によって「絶対平和主義者による政府」（Pacifist government）は、矛盾した語法（an oxymoron, a contradiction of terms）でした。出版社として成功し、ベン・フランクリン（Ben Franklin）との競争者でもあり、そして当時のプレズレン派のもっとも影響力のある代弁者であったクリストファー・ソーアー二世（Christopher Sauer II）は、次のように言いました。「全世界の居住地の中で現在に至るまでペンシルベニアほど理想的な地はない」と。これらの宗教集団によって、どこの地に非暴力主義者を歓迎してくれた政府を探しえようか。いやないだろう。プレズレンにとっては、豊穡の大地を与えられ、統治者による抑圧から解放されたのであり、まさにそれは「地の平和」そのものでした。しかしながら、それは半世紀も続くことはありませんでした。1756年のフランス・インド戦争における軍事的保護への圧力は、クエーカーによる統治を終わりに導き、20年後に起きた米国独立戦争は戦争による流血に覆われた生まれたばかりの国家を再び世界へと目を向けさせたのであった。

英国に対するアメリカ独立戦争は、プレズレンにとっての「地に平和」を終わらせるこ

とになりました。先に述べた著名なプレズレン派の出版業者であるクリストファー・ソーアー・ジュニアとタンカー派は、革命という暴力の最中にも中立の立場を取ろうと努めていました。ソーアーは戦争の犠牲者を助けるための基金作りに多大な貢献をしましたが、アメリカ独立戦争を支持することを拒否していました。彼は自分の家から引きずり出され、その家には黒と赤の石油でペイントされ、またぼろぼろの服を着せられた状態でバリーフォージュ（Valley Forge）まで行進させられました。ソーアーは自分の信仰をしっかりと守り、忠誠への宣誓に署名することを拒み続けました。そのことが新約聖書の教えに背くことになることを理解していたからです。彼の富や印刷所、財産は没収され、売りに出されました。彼は決して自らの主張を撤回することなく、高齢になるまで信仰を同じくする人々に世話をして頂きながら、貧しいまま亡くなりました。

今日のプレズレンを取り巻く状況は、変わってきています。米国では人々が建国記念日である7月4日を祝福し、愛国心を持ちながら祖国への愛や米国の外交政策や戦争を支持する愛国主義を確かめています。しかしながら、プレズレン派の方針は、信条として全ての戦争に、そして戦争の支持の程度や国家による正当化の有無に関わらず、実際の個々の戦争全てに対して一貫して反対を唱え続けるということです。第一次世界大戦では、数多くのプレズレンの若者達が非戦闘員として戦場へと連れ出されました。中には農業による徴兵猶予（agricultural deferments）を得る者もいました。刑務所に行った者も中にはいました。私の学生時代の英語の教授は、彼が決して軍服を着ることなく、そして武器も携帯しなかったことを理由に、カンザス州にある連邦刑務所であるフォート・リーベンウォース（Ft. Leavenworth）において絞首刑にされました。

第二次世界大戦では、徴兵を拒否した徴兵の年齢を迎えるブレズレンの絶対平和主義者たちは、市民による公共奉仕のための収容所 (Civilian Public Service Camps) に追いやられました。そこで彼らは建築作業員になったり、森林火災による煙を消す作業員になったり、心療内科病棟の従事者となったり、また時には空腹に関する研究のためのボランティアになったりしていました。一人として報酬や兵士報酬を受け取る人はおらず、先に述べた三つの絶対平和主義教会がその収容所のための費用を払いました。そこには様々な宗派からの絶対平和主義者のキリスト教徒に加えて無神論者、不可知論者、政治的抵抗者も含まれていました。12,000人にもほのぼの抵抗者が152もの収容所に入れられていました。戦争に反対した6,000人は刑務所に入れられました。

強制的な軍事的奉仕は1950年代、1960年代という冷戦時代まで続きました。その間、承認された機関における代替的な奉仕が、宗教的な理由による絶対平和主義者に認められました。しかしながら、戦争には正義の戦争もあればそうでない戦争もあり、またもしも戦争が防衛的なものでなく、また最後の手段でもなく、全ての市民を守るものでもなければ、それらは認められないという教会の教義の教えとしての伝統的な正戦論 (just war theory) に依拠した抵抗者に対しては認められませんでした。そのような反対者は軍隊に非戦闘的な軍事的奉仕のために加わるか、または刑務所に入るかを要求されたのでした。強制的な軍事的徴兵制度は (Compulsory military draft) 1973年まで続きました。その時期になり、ベトナムにおける米国の戦争への抵抗者の数が拡大し、裁判所は反対者たちで忙殺される事態になり、徴兵制度は終わりを告げたのでした。その二年後の1975年に、米国の軍隊はベトナムから完全に徹底をしました。

ブレズレン派は、これまでの絶対平和主義

の遺産に忠実であることを公言し続けています。1991年には、イラクに対する最初の湾岸戦争の時期に、最終決定機関である年次総会のブレズレン教会の代表者達は、これまで以上に平和を作り出すことに関する総合的な声明を承認しました。再度2003年に米国がイラクへ侵攻した後は、その年次総会の代表者達は、活動的なキリスト教の平和の証言者となることを追求する際にイエス・キリストに従うという決議を出しました。その決議文書で、ブレズレン派は一貫して神と隣人たちへの背徳行為としての戦争に反対することを再確認したのでした。

ブレズレン派は決して大規模になることはなく、また政治的にも影響力のある集団にはなりえませんでした。19世紀には、地方において農業に従事していたため、彼らは質素さを強調し、周りに分かるような服装をし、そして政治から距離を置き、投票もせず、全てにおいて正直に対応し、彼らの言葉をもって絆を強めることで弁護士に頼むこともしませんでした。彼らは良き農地を探し求め、最終的には200,000キロを超えるペンシルベニアからカリフォルニアへと大陸を移動したのでした。彼らは奴隷制度に反対していたため、米国の南部へ移った者はほとんどいませんでした。彼らはまた神学教育にも懐疑的でした。しかしながら南北戦争後には六つの大学を作り、現在も存在しています。全てリベラル・アーツの4年生の大学であり、そのうち五つの大学で平和学の学士号を出しています。ペンシルベニアにあるジュニアータ大学 (Junata College) や、私が所属するマンチェスター大学では平和学でも平和学の学士号を出しています。六つの大学が連合して作り上げたBCAという組織は、現在ではドイツ、エクアドル、中国の大連、北アイルランド、メキシコ、スペインのバルセロナ、そして日本の北星学園大学と提携を結んでいます。

3. マンチェスター大学

マンチェスター大学は、財政や規模において適度な機関であり、約1,200人の学生が在籍をしています。この規模は私が約50年前に教え始めた当時とほとんど変わりありません。学生は21の州と異なる20の国から来ています。ほとんどがインディアナ州の北部出身の学生です。全ての学生が何らかの授業料や諸費用に対して財政的な支援を受けています。創立者が農業従事者であったこともあり、大学はシカゴから南西250キロも離れた酪農場、トウモロコシ畑、そして大豆畑のまさに真ん中に位置しています。1889年に設立した大学であり、主として学問を通してキリスト教の教えを提供しようと考えられたため、長年に渡りその中心となるプログラムは、教師として公立学校で教える学生を育てることにありました。今日では会計学と教師教育が大きな二つの領域となっています。私が1961年にマンチェスター大学で教え始めた時には学生の半数がブレズレン派の関係者でしたが、現在では5パーセントであり、恐らくは教員集団のブレズレン派の割合は20パーセントだと思います。

4. マンチェスター大学における平和学の開設

米国も日本もヨーロッパも、そして世界全体が戦争にひどく疲れ、そしてその甚大な戦争のコストに気づき、平和と軍縮と国際連合を通じた国際協調を実現しようとした1945年以後まもなくという時期のことでした。ブレズレン派は戦争に傷ついたヨーロッパを中心に救援活動をしていました。その間に国家の指導者達は国際協調とグローバル・ガバナンスの必要性を認識していました。我々の政府も軍縮に向けて歩みを進め、ほどなくして徴収兵を廃止しました。国際連合が誕生し、

これまでの何世紀にも及ぶ長く続いた個々の国家の近視眼的な自己利益（myopic self-interest）のみに基づいた十分に機能を果たすことのなかった無秩序状態における戦争指導者、帝国、そして国家という文明的な呪縛に挑戦することとなりました。

平和について考えるには良い時期であり、そしてそのような国際的な希望や期待が湧き出てきた時期である1948年に、マンチェスター大学の平和学プログラムは誕生したのでした。ダン・ウエスト（Dan West）というインディアナ州出身のブレズレンの農業従事者は、第一次世界大戦中変わらず非戦闘員の徴兵者であり続け、そののちに1930年代におけるスペイン内戦時の混沌とした状況の中で、子ども達が餓死する状況を絶望的なほどに目撃することになりました。そのことが彼を突き動かし、1948年にはブレズレン・ボランティア・サービス（BVS: Brethren Volunteer Service）を設立したのでした。それは現在のピース・コープ（Peace Corp）や国内版のアメリカ・コープ（AmeriCorps）という非政府組織の原型を形作ったのでした。ダン・ウエストはまた後にハイファー・プロジェクト（Heifer Project）と呼ばれるプロジェクトを開始し、そのことを契機にブレズレンの酪農業者たちは必要とされる海外の人々に牛を送り始めたのでした。その家畜は米国から海洋を渡り「海を渡るカウボーイ（seagoing cowboys）」によって運ばれていきました。今日のハイファー・インターナショナル（Heifer International）は、巨大な慈善事業となっています。ブレズレン・ボランティア・サービスやハイファー・プロジェクトに加えて、この実践家である農業従事者はブレズレンのために三つ目のプログラムを始めたのでした。1947年にダン・ウエストは自分の農場から母校であるマンチェスター大学まで車で駆けつけ、後の平和学のカリキュラムの母体となる最初の平和学の科目を教え始めた

のでした。1947年当時の科目の名称は「永続的な平和のための基盤 (Bases for an Enduring Peace)」であり、第二次世界大戦後には確実に必要な内容でした。五つの学問領域を代表し、教務部長によって学科主任教授となった経済学者が、その年の冬にその科目を教えたのでした。

1948年の冬には、マンチェスター大学の学長がカリフォルニア州にあるラ・バーン大学 (La Verne College) の歴史学の女性教授である、グラディス・ミュアー (Gladdys Muir) を招聘し、彼女は平和学プログラムの最初の所長となつたのでした。ミュアー教授は53歳のプレズレンであり、クエーカーに大きな影響を受けた人物でした。1947年の夏以降は、ペンシルベニア州にあるクエーカーのリトリート・センターであるペンドル・ヒル (Pendle Hill) において、ミュアーは「平和のリーダーシップのための人々を育てるためにプレズレン派の大学がなすべきこと (The Place of the Brethren Colleges in Preparing Men and Women for Peace Leadership)」を書いています。それが彼女を世界ではじめて平和学で学士号を出す学術的な平和学プログラムの創設者とならしめたのでした。ミュアーは、平和学への追求の礎として、彼女の人生の神聖と人間としての本質的な統一性という宗教的な信条を据えていました。彼女のアプローチの仕方は、大変精神的であり、エキュメニカルなものでした。また、文明に関する哲学を平和への基礎として考えていました。例えばアーノルド・トインビー (Arnold Toynbee) であり、アルバート・シュバイツァー (Albert Schweitzer) であり、ソロキン (Sorokin) であり、アルフレッド・ノース・ホワイトヘッド (Alfred North Whitehead) であり、1918年に「西洋の衰退 (Decline of the West)」を出版した、全ての文明は成長するが自然界における植物のようにいつかは滅びなければならないという

ことを信じた運命論者であるドイツ人のオスワルド・スペングラー (Oswald Spengler) でした。グラディス・ミュアーは彼女の精神的なルーツゆえに、絶えず希望を抱いていました。彼女の精神性は数、特にクエーカーであるエルトン・トゥループブラッド (Elton Trueblood) から勇気づけられていました。彼女は、「最も必要なものは新しい科学技術ではなく、人生の目的に訴えかける精神性であり、戦争よりも平和を作り出すという心を育てるのが教育である (what is needed most is not new technology but a spirituality that speaks to life's purpose, and education that nourishes the soul for peacemaking rather than war)」ということを感じて止みませんでした。彼女は、課せられたその使命として、信条に基づいて設立された大学が、自明のこととして他の公的な大学以上にすべきことだと述べています。マンチェスター大学における平和学のパイオニアは、視野の広いエキュメニカルで文化的関心の強いこのような女性であったのです。彼女は世界の諸宗教を大切に、平和を作り出すための精神的・道徳的な財産から教訓を引き出そうとしていました。

5. マンチェスター大学の学術的な平和学プログラム

マンチェスター大学の学術的な平和学プログラムの骨格は、今も変わりません。約20名の平和学専攻の学生がおり、その多くは3年次に前述したBCA という交換留学プログラムを活用して海外で学びます。学際的なプログラムとなっており、平和学を専攻する学生は九つの必修科目を五つの領域から履修し、また専門とする分野に応じて五つの選択科目を履修します。私たちの学術的なプログラムは、これまでさほど大きく変わったことはありません。学生は二つの専攻を持つことも可

能です。将来医学部に進もうと考えている学生（pre-medical students）で、平和学を専攻している学生もいます。最近では、環境学（environmental studies）が私たちの学生にとって人気が出ています。多くの学生が政治学、社会学、心理学と平和学を組み合わせています。また、平和・紛争学（peace and conflict studies）という副専攻（minor）を取ることも可能となっています。

平和学専攻の学生は、五つの領域から九つの授業を履修することになります（現在はホームページ上でその詳細を見ることが出来ます）。

「平和学概論」(Introduction to Peace Studies)

「国際関係論」(International Relations)

「平和と戦争の分析」(Analysis of War and Peace)

「環境哲学」(Environmental Philosophy)

「社会変化」(Social Change)

「紛争解決」(Conflict Resolution)

「非暴力の文学」(Literature of Nonviolence)

「文明の哲学」(Philosophy of Civilization)

「宗教と戦争」(Religions and War)

また平和学専攻の学生は、下記の三つの領域の一つを専攻するか、または自分自身で考えた領域（承認が必要）を専攻することになります。

1. 国際・グローバル学 (International and Global Studies)
2. 対人・対集団紛争解決 (Interpersonal and Intergroup Conflict Resolution)
3. 平和のための哲学的・宗教的な基盤 (Philosophical and Religious Bases for Peace)
4. 自分自身で考えた領域 (Individualized)
*平和学教育協議会 (Peace Studies

Teaching Council) による承認が必要

卒業には一定以上成績（portfolio）と最終総合口頭試験（a final comprehensive oral exam）を少なくとも二人の教員と受けることが必要となります。

私たちのキャンパス内での活動も重要な手段となります。その活動は、ガンジーやキング牧師、ドロシー・デイ（Dorothy Day）、ダン・ウエストやグラディス・ミュアーなど、著名な平和を作り出してきた人々に捧げられた「平和の家（Peace House）」に住む、フルタイムの平和学卒業生のインターン学生によって、支援されています。先月私たちは、1年前に自動車による交通事故で亡くなった二人の卒業生のために、新たな飾り額を設けました。その二人は軍事費にかかる税金不払い運動に関わり、全ての戦争に反対する良き手本でありました。毎週のように映画の上映や議論がここ「平和の家」で開催されています。

昨年の秋に行われた活動としては、11月1日の「退役軍人の日（Veterans Day）」には、イラクやアフガニスタンで亡くなった兵士達を追悼するためにキャンパスの芝生の上に何百もの白い十字架を置きました。キャンパスを訪れた軍隊への採用者の是非に関して、同月16日には公開の討論会を行いました。私たちは、キャンパスのキリスト教委員会が企画するスピーカーの準備を手助けをしたり、毎年春学期に行われる「平和週間（Peace Week）」のためにコンサートや活動の手伝いをもしています。

色々な人の話を聞いたり、昨秋はシカゴで行われた共同プロジェクトに参加するために車で移動する旅行（van trip）にも出かけます。そこでは学生は、コロンビアやイラク、パレスチナといった紛争地域に平和チームを送る集団である「キリスト教による平和を作り出すチーム（CPT: Christian Peacemaker Teams）」の新しいオフィスのペンキ塗りを手伝いました。毎年11月には、数多くの学生

が、虐殺や大量殺戮に関係するラテンアメリカの将校のための訓練施設である、2500キロ以上離れたジョージア州のフォートベニング (Ft. Benning) にある「アメリカ学校 (the School of Americas)」に対して、エキュメニカルな反対運動に参加するために行きます。また毎年のように、戦争に反対するために学生と教員が一緒になりワシントン D.C やニューヨークに向かい、全国的な反対運動に参加もしています。外部から招く講演のための基金 (Endowed lectureships) により、私たちは年に数回ゲスト・スピーカを招くことが出来ます。昨年(2010年)の12月にはマンチェスター大学にジェフリー・コバック博士 (Dr. Jeffrey Kovac) を招きました。コバック博士は自身の著書「戦争を拒否する：平和を確信する (Refusing War: Affirming Peace)」を元に講演し、多くの聴衆が彼の発表に耳を傾けていました。

また他の重要な学びと共同体の場として、「キナポコモコ連合 (kenapocomoco coalition)」と呼ばれる毎週月曜日の夜遅くから行われる議論の場があります。それは45年以上に渡って大学がある期間に、私の家の居間で行われています。時折外部からゲストをお招きして、自由な議論をポップコーンやコーヒーや紅茶をたしなみながら行っています。その場は、世界が今まで以上に愛すべき場所になるという若者の情熱を感じる場ともなっています。

一月学期の学び／旅行期間 (January Study /Travel Interims)

1970年に、マンチェスター大学はそれまで12週で三学期のクォーター制度から、キャンパス外で旅行をしたり学んだりすることが出来る、1月期間 (3週間) を含むカレンダーに変更しました。この変更は私の人生を変えました。なぜならば、30年以上にもなるこの1月学期の経験を通して、私は小規模の集団

の学生と共に海外へ赴き、奉仕や平和や正義に関する議論を通して地球的な視野を身につけることが出来たのです。観光とは一線を画す活動を絶えず追求してきました。

私たちはハイチのポート・オウ・プランス (Port au Prince) で孤児院で過ごす子ども達の深刻な貧困を目の当たりにしました。私たちはまたメキシコのチナパス (chiapas) で苦勞して育てている、急な山沿いにあるコーヒー豆の収穫をしたこともありました。私たちは、米国が主導した中央アメリカのニカラグアへの攻撃によって夫や子ども達を失ったことが原因で自らの殻に閉じこもり、心傷ついたほとんど耳が聞こえない未亡人たちの苦悩にも耳を傾ける機会が与えられました。そこで私たちは1980年代に1月を四度活用して現地へ赴き、協力関係を築いたり家の建築を手伝ったりしました。私たちは二度北アイルランドに学生を連れて、カトリックとプロテスタントの間で起きている内戦について学びにも行きました。また、中央インドにあるワルダ・アシュラム (Wardha Ashram) の近くにあるガンジー研究所 (Gandhi Institute) で学んだこともあります。ベトナム戦争の時に掘られたホーチミン市にあるベトコンのトンネルを潜ったこともあります。その時には米国の軍隊によって殺戮された村であるミ・ライ (Mi Lai) の現場で仲裁を試みたこともあります。ジャマイカやメキシコ国境の近くにあるテキサス州で「人類のための居住の家 (Habitat for Humanity houses)」を建て、ハリケーンで損害をうけたカリブ海諸国で復旧作業を手伝ったこともありました。私たちは米国の南部における公民権運動について学びました。私は学生たちと共に世界を変えるために模索しながら、絆を深めながら行うそのような経験の重要性を、ひしひしと cảm じています。そのような経験が、消費社会に彩られた現代社会において私たちをも変えるのです。それがまさに教育と言えらると思います。

す。私の人生はそうあり続けてきました。

またマンチェスター大学は、国際連合に登録されている非政府組織（NGO）であり、米国における唯一の大学でもあります。私はその役割を得た理由として、国際連合自体の創立直後に私たちの平和学プログラムが始まったことがあると思っています。私たちは国際連合の本部があるニューヨークに、その私たちの代表を務める卒業生がおり、定期的に報告を受けています。しかし財政的な理由により、私たちはそのユニークな関係性の十分に活用しきれない面があります。私たちの大学では国際連合の旗をキャンパスに掲げておりますし、毎年ボストンで開催される模擬国連（Model U.N.）に学生が参加しています。国際連合の活動を米国のテレビや新聞はほとんど伝えません。オバマ大統領による国際連合の安全保障理事会における核軍縮イニシアチブや、核不拡散条約を強化し、世界から核兵器を削減する道筋を真剣に模索することを目的としたジュネーブやパリの会議について聞いたことがある人はほとんどいないと思います。私たちが心から希望することは、オバマ大統領が核軍縮や核分裂性物質の国際的な監視強化に関してさらに歩みを進めるということです。

6. 平和教育と平和研究の成長

政治学や心理学、社会学や宗教と哲学という複数の学科から成る平和学という学際的なプログラムは、1948年にマンチェスター大学で開始となりました。二番目が1966年にニューヨークにあるローマ・カトリック系の大学であるマンハッタン大学で、その次は1970年のコルゲート大学でした。ベトナム戦争の終了の時期には、平和学のプログラムは拡大し始めており、現在では約400以上の大学が平和学やその関連の科目を設置しており、その中の約75の大学が平和学の学士号を出していま

す。

平和学に関して言えば、その科目や関連するプログラムは着実に成長を遂げていったのですが、その理由の一つとしては、私たちの未来を脅かす核兵器の影があったためだと思います。COPRED（Consortium for Peace, Research, Education & Development）という平和研究学会は1960年に誕生しましたが、それは経済学者であるケネス・ボールドディング（Kenneth Boulding）と妻で社会学者であるエリーズ・ボールドディング（Elise Boulding）によって生まれていきました。COPREDの最初の事務局はマンチェスター大学にありました。その後、小学校や大学のカリキュラムのための平和の課題を考え続けてきました。1987年には、研究者は別の平和研究学会（PSA：Peace Studies Association）を設立し、より広大な学術的な認知と基金を求めました。

しかしながら、学際的なプログラムは決して平坦なものではありませんでした。2001年にはこの二つの団体が現在の平和・正義学会（PJSA：Peace and Justice Studies Association）に統合されました。年次集会を行い、次回は10月にカナダのマニトバ州にあるウイニベグで開催されます。

PJSAは1964年に設立された国際平和研究学会（IPRA：International Peace Research Association）と連携しており、IPRAは二年ごとに様々な国で集まりを持っています。IPRAとPJSAの共同名簿によれば、世界には40か国で450もの平和学プログラムや関連するプログラムが存在するようです。PJSAには今現在、米国に400以上もの学術的なプログラムが会員として登録されています。1930年に生まれ、平和研究の父であるノルウェー人の社会学者であるヨハン・ガルトゥング（Johan Galtung）は、1959年に国際平和研究所（International Peace Research Institute）を設立し、その五年後には平和研究紀

要 (Journal of Peace Research) を刊行しました。彼は驚くべき量を執筆しています。彼は現在でもヨーロッパの平和研究では主流となっている、消極的平和、つまり戦争の不在と、システムとしての社会的、性的、生態学的、経済学的正義の実現という積極的平和との差異について明らかにしました。近年では、彼は暴力や戦争の根源や社会という側面から、文化的暴力に対する挑戦を強調しています。

7. 冷戦

第二次世界大戦が終結し、軍国主義に終止符が打たれた後のつかの間の楽観主義は、長くは続きませんでした。唯一原子爆弾を持っていた米国政府は、原子爆弾を作るのに加担した科学者の、このような大変危険なものは国際的な監視下の管理下に置くべきであるという助言に背きました。予想されたことではありませんが、1949年までには当時のソ連が初めての爆弾を試し、その後ほどなくして両者とも水素爆弾を作り出しました。マンチェスター大学における最初の40年間は、ソ連の攻撃という恐怖や国内の共産主義者による反政府行為だとして、国際的な平和を作り出す人々に対してナイーブな理想主義者であると攻撃された40年間でもありました。平和という言葉自体がソ連のプロパガンダに採用されていたこともあり、アメリカ文化の中では拒み続けられ、そして思慮が足りないと思われていました。第二次世界大戦に戦勝した軍国主義はその後も支配を続け、ソ連との軍拡競争を煽り続け、後の冷戦となりました。米国の世論は、1950年代のソ連の大陸間の爆弾と比較すれば、重大な不備があると警鐘を鳴らし続けていました。実際には1957年のスプトニック号以後1960年代に至るまで、脅威となるミサイルの格差は決してありえませんでした。再度強調しますが、決してなかったのです。

その結果が大量の核兵器の存在であり、核兵器ではない兵器の装備の存在です。それはアイゼンハワー将軍が大統領スピーチの中で展開した軍産複合体の危険性という結果をもたらしたのでした。その危険は五つ星の将軍と言われる彼であっても無視されたのでした。

アイゼンハワーの警告は共産主義に対する被害妄想として無視されたのです。私が1961年に教え始めた時に、共産主義者はどこにでもいると言われていました。私たちは、公立学校にも彼らがスパイとして潜伏していることが疑われると言われたものでした。例えば飲料水への虫歯予防へのフッ化物の添加といった公共健康計画や性教育は共産主義者のたくらみである、と見なされていました。私たちの大学も同様に共産主義者によって乗っ取られていると見なされることもありました。この点について私自身の人生について振り返ってみても、学生時代と大学院生時代の9年間を様々なキャンパスで過ごしてきましたが、一度も共産主義者の人に出会ったことがありませんでした。このような経験から、私は米国の教育における共産主義者の存在に関する嫌疑が虚偽であることを悟るに至りました。

平和学は今日に至るまで、米国の右派のコメンテーターによって攻撃され続けています。大学の経営者たちや支援してくれている財団 (college administrations and supporting foundations) は、「地球的安全保障学 (global security studies)」や「紛争マネジメント (conflict management)」という言葉に好意を持っていました。マンチェスター大学における学長をはじめ、選ばれし教員集団による委員会は、そのようなより世間受けをする名称 (the more publicly-acceptable labels) を考えてもいましたが、しかしながら最終的に平和学というその用語と内容の不人気にも関わらず、平和学という私たちの申し出を受け入れました。

さて私は以前にも日本を訪れたことがあり

ます。1977年の夏に、ガンジーに影響を受けた仏教者にお世話になり、私は東京から広島までのピース・ウォークという旅行に参加しました。それは毎年広島で行われる原子爆弾に関する会議の前に行われたのでした。米国で平和を唱えることに否と言われることが多かったのとは対照的に、訪れる市町村では首長自らが挨拶に駆けつけてくれ、ピース・ウォークに支援を表明してくれることに驚きました。冷戦時代に、私はニューヨークからフィラデルフィアまでピース・ウォークを行いましたが、状況は全く違うものでした。都市で出会った政治家はいませんでした。この広島へのピース・ウォークは私に強烈な印象を与えました。これまでの過去の経験で忘れたことも多い中、この記憶は今でも強く残っています。

8. ベトナムにおける米国の戦争

1964年から1975年にかけて行われたベトナム戦争の期間には、様々な階級や試験によってなされ、最終的には抽選に基づいてなされていた軍隊への徴兵制度は、戦争の問題を学生の生命の問題へと導いていったのでした。米国の関与が深まるにつれて、キャンパスにおける活動も高まっていきました。関わっていなかった学生は10パーセントにも満たなかったと思います。恐らくは通信を発行したり、議論を組織化したり講演や会議を企画したり、地元やワシントンD.Cで反対運動をする中核となる学生は3から4パーセントの学生でした。彼らは数少ない反戦を掲げる教員（絶対平和主義者もいれば絶対平和主義者ではない者もいた）が支援をしていました。1967年から1973年に渡る6年という長い年月を通して、それが誤った道であり、不道德な対立として反対を表明することは、それに同意することが愛国的であると見なされ、また戦争を支持し兵士を支援することになると異義申し

立てをする教員や大学管理者を分断させたのでした。例えばカリフォルニア大学バークレー校、ウィスコンシン大学マディソン校、ミシガン大学のような公立の大学やシカゴ大学、ハーバード大学、イエール大学、コロンビア大学のような知名度が高い私立大学では、学生と教師が共に戦争への反対を表明する大学も出てきました。よくセットされた髪型でスーツにネクタイを締めていた男性たちは、無責任な戦争に責任があったのです。それは学生の年代の若者たちを対抗文化のアイデンティティとして、スーツにネクタイというスタイルを無視するように導いたのでした。私たちはキャンパスにおいてさえ少数派でありましたが、積極的行動主義の性質がそうであるように、人数は少なくとも行動する人は、行動しない大多数の人々より目立つものです。文化人類学者であるマーガレット・メッド (Margaret Mead) は、「小さな手段であっても思慮深く、献身的な市民たちこそが世界を変えることが出来るということを決して疑ってはいけません。実際にそうなるのは、そこからなのです (Never doubt that a small group of thoughtful, committed citizens can change the world; indeed, it's the only thing that ever has.)」という引用でよく知られています。その言葉は、私たちが人生に確信を与える際に励まされる言葉であり続けています。

ベトナム戦争も佳境に入る段階で、戦争への反対の声と平和を訴える声を上げることが、私たちにとって、特にキャンパス外で難しくなっていました。卵を私たちの家や車に投げつけられ、夜遅く私の妻に見知らぬ者から電話がかかってきたり、私たちの車庫に放火するという脅しもありました。台所の火を付けるとガスバーナーがあったこともありました。幸運にも、私たちはそのガスが爆発する前に帰宅し発見できたため、大事に至ることはありませんでした。そのような非難は心地

よいものではありませんでしたが、歴史的な観点から考えたり、過去の反対を唱えていた人々と比較して考えてみれば、私たちの問題は取るに足らないことでありました。

9. 今日の平和学への試練

1980年代から1991年の突然の事態に至るまで政治学やいわゆる政治的現実主義と呼ばれて支配していた米国とソ連という二極体制は、米国がソ連の崩壊に伴ってその敵を失うという結末に至りました。両政府の関係者や学者たちでさえも、防衛理論や軍備拡張競争が的外れであるという可能性を考慮することはありませんでした。しかしながら、平和と国内を優先して考えるという機会の窓を与えられた瞬間は、私たちの軍事産業化や研究、外交政策や経済的な優先事項など根本的に再考を迫るものでありました。愛国主義について新しい考え方が求められ、また国家の安全保障や地球規模の協力のあり方について新しいアプローチの仕方が必要となったのです。

しかしながら、それは実現しませんでした。その代わりに、新しい敵が突然発見され、米国は「永遠の戦争状態 (a state of perpetual war)」のままとなりました。今日では、米国は海外の130か国以上に730以上の基地を持っています (もしかすると正確に計算すれば1,000以上になるかもしれません)。500,000人にも及ぶ人員がおり、公海上に13もの海軍機動部隊が配備され、それぞれに最新の死の科学技術が搭載された戦闘機が備え付けられています。

私たちの国防総省は234もの軍隊のためのゴルフ・コースを持っており、高官のためにはババリアン・アルプス (Bavarian Alps) にスキーや休暇のための施設が用意されており、また将官や将軍レベルでは休暇のために豪華なジェット機まで用意されています。軍事予算として何十億ドルも費やすための説明

責任など、ほとんどありません。世界中に広がる軍事基地は、敵が誰であってもどこにいても、駆けつけてその敵を鎮圧することが出来るという、新保守主義の戦略である「地球的な受難 (global calvary)」戦略から、「足跡 (footprints)」または時折「水に浮かんでいるスイレンの丸い葉 (lily pads)」と呼ばれています。イラクへの侵攻や米国が持つ恒久的な基地の存在の背後にはこのような理論がありました。米国の軍事基地は、経済的政治的な利益を促進するために、全世界を超えて地域における防衛力を提供しています。

沖縄の問題は、このような米国の足跡戦略が日本の意識に影響を与えている問題と言えます。米国では海外の基地についてほとんど知っている人はおらず、日米安保条約やその後の合意事項についても同様です。米国の国民はもっとも沖縄における海兵隊の多大な影響力について意識していないと言ってよいと思います。犯罪を犯した者たちだけではなく、環境破壊についても日米地位協定によって海兵隊員たちが日本の司法権から免れていることについてもです。そのような合意は、米国の地において海外の軍隊が同様のことを行うことは決して考えられないと思います。不幸にも外交政策というのはしばしば二枚舌外交になることがあり、個々の関係性において受け入れがたく弁護の余地のない偽善になりえます。

沖縄は、地球規模で軍事的な影響力を確保する (global reach) という米国の地球規模に拡大した軍事的戦略の典型です。現代版の「植民地」となり、米国の政治的経済的利益を確保するために生み出された軍事化された帝国と言えます。私たちの軍事化のコストは驚くべきものであり、支えきれないものです。もしも関連する予算が全て含まれていたとすれば (退役軍人関係の予算、原子力発電委員会、国土安全保障省、18ないしはそれ以上あ

るCIAを含めた諜報機関)、全ての予算規模は他国の軍事費全てを合わせた額をはるかに上回る、毎年100兆ドルに匹敵します。そのような誤った富の配分は支えきれないものです。私たちのインフラは錆びつきつつあります。現存する公共交通機関はひどいものです。私たちの住む地域には電車が走っていません。医療保険制度についてもこれまでの二倍の予算を使っていますが、まったくの混沌状態が続いています。個人の破産の半数は、医療費の支払いが出来ないことに関係しています。米国が帝国である時代は長くはありません。そのパターンはこれまでと似ています。巨額の富が巨大な権力と化しますが、しかしながらその権力がその富を破壊し、帝国が陥落していくのです。

10. マンチェスター大学の平和学の未来

私たちのプログラムはあくまでも控えめなプログラムです。例えばハーバード大学のケネディー・スクール、コロンビア大学、プリンストン大学のウッドロー・ウィルソン・スクール、ジョージタウン大学、タフツ大学のフレッチャー・スクール、スタンフォード大学などは、米国社会における政治的なエリートを育成しています。私たちのプログラムは、むしろ権力エリートを輩出しないことを目的としています。私たちは人類への奉仕者 (servants of humankind) を輩出したいのです。私たちの卒業生はNGOや人権の改善を意図する非営利組織等に行きます。先に述べた「ハイファー・プロジェクト (Heifer International)」、「人類のための居住 (Habitat for Humanity)」、「アメリカ・コープ (AmeriCorps)」、「クロップ (CROP)」、「ラテン・アメリカにおける平和の証言 (Witness for Peace in Latin America)」といったNGOの他に国際連合に行った卒業生もいます。その他にもソーシャル・ワーカーや学校の教師、

大学の教授、教会関係者、調停や紛争解決に関するカウンセラー、そして地域振興に携わる者など多岐に渡っています。先に述べたBCAの元所長であるアレン・ディーター (Allen Deeter) は、マンチェスター大学の平和学の卒業生でした。私たちは今後も名声や卓越性や権力のためにというよりも、奉仕のために教育に携わっていくことを希望します。

私たちが予算的に裕福になるということはないと思っています。国家と同様に、お金が常に前進につながるとは限りません。大規模な遺産 (bequests) は崩壊しえます。私たちは基金を希望はしますが、多くは希望していません。私たちが最も必要とすることであり、その資産 (asset) とは、平和を作り出す知識と実践に身をささげる献身的な教員集団 (dedicated faculty who are committed to the knowledge and practice of peace-making) なのです。

私たちの使命は、暴力と戦争を支持するという文化的な仮定に対して挑戦し、連帯のためのスキルを提供することにあります。私たちは卒業要件をより充実したものになるように、検討を重ねています。そのようにして、私たちはより多くの学生の人生に影響を与えたいと思います。「平和学序論 (Introduction to Peace studies)」という授業は、まずアメリカ社会を席卷している個人や社会的な暴力に関する内容から始まり、その後、構造的な不正義に諸問題へと移り、最終的には戦争と平和というより論争的な内容へと移っていきます。私たちには私たちの戦争が必要であり、戦争が過去においては私たちに自由を与え、そして未来においては自由であるためには戦争が今後も必要となるという神話に異議申し立てをするためにも、例えば歴史学のような関連する領域の教員が必要です。

言い換えれば、私たちに必要なことは、歴史修正主義 (revisionist history) を未来の

修正 (a revised future) へと転換することだと思っています。私たちには、暴力の代理と戦争への代替案を知っており、それらを教えることが出来る修正主義者の社会学者と博愛主義者を必要としているのです。私たちは私たちのためによく働く「現実主義者」によって見落とされている現実を伝える必要があるのです。並々ならぬ犠牲を出しながらも、戦争には本当の勝者がいないという痛々しい教訓が数多くあるのです。ジャネット・ラスキン (Jeannette Rankin) は、「戦争に勝つということは、地震にあうようなものである」と述べています。米国は二つの世界大戦から誤った教訓を学んでしまいました。私たちが学んだと思っていたことは、あまりにも高く付いてしまいました。しかしながら、同様に歴史から解放的で新しい解釈を可能にするような教訓をも得ることが可能です。1980年代後半から1990年代初頭にかけて見られた非暴力革命の成功事例は、戦争の神話以上に教えられるべきです。そんなに昔ではない時期に、11か国の15億人以上の人々が中国を除きますが各国において非暴力革命を達成したのです。ルーマニアやいくつかの旧ソ連邦の国々で、暴力が見られた国もありました。世界の政治地図は、1986年以降の10年で戦争なしで変わったのです。世界の人口の半数が、人々の知恵が流血を不可能にしたという非暴力的な変化を経験したのです。

西洋の歴史家たちは、20世紀の偉大な人物としてガンジー、アインシュタイン、キング牧師を挙げています。三名全員が最終的には絶対平和主義者 (pacifists) となりましたが、そのような信条は時として彼らの信奉者から見落とされがちです。平和学の使命は、より融和的でより人間的な世界となるように未来のリーダーたちにその重要性を知らしめ、そして彼らを鼓舞することだと思っています。

ほとんど全員が平和の目的を欲すると思います。米国の空爆機には「平和は私たちのピ

ジネスです」というスローガンのもとで飛び続けています。私たちは平和を作り出す営みを、目的と切り離すことの出来ない手段として考えるようにしなければなりません。A.J. ムストゥ (A.J. Muste) が言うように、「平和への道はなく、平和そのものが道なのです (There is no way to peace. Peace is the way.)」。私たちは、非暴力こそが個人間だけではなく国家間の中で作用するというガンジーの洞察力を教えていかなければなりません。人類は、私たちが人食いの慣習や近親相姦に対して否と言っているように、殺戮に対しても否と言いつけるためにも非致命的な力や節度を使う能力を育まなければなりません。私たちは精神的にも知的にも (spiritually and intellectually) 非暴力主義者になる必要があるのです。

徐々にマンチェスター大学の平和学は非暴力の理論と実践を強調するようになりました。現在はホームページ上で読むことが出来ますが、1971年以来発行している私たちの紀要は現在、「非暴力による社会変化に関する紀要 (Journal of Nonviolent Social Change)」と名前を新たにしました。私たちは学生に、米国における市民権獲得のための運動、インドにおけるガンジー、ナチス時代のドイツ人に対するデンマーク人の抵抗、南アフリカにおけるマンデラの教訓を学んで欲しいと考えており、そしてそこから実践に移して欲しいと願ってやみません。また、説得や非協力の方法や「非暴力行動の政治」(Politics of Nonviolent Action) という三巻に及ぶ著書で有名なジーン・シャープ (Gene Sharp) によって分類化された代替案についても学んで欲しいと思います。

私たちの起源も、私たちの信仰も、そして私たちの経験もまた、平和は非致命的な手段を通して達成させられるのだという確信を導いてくれます。私は毎日のように、アシジの聖フランシスが唱えた祈りを繰り返すように

しています。「神様、どうか私をあなたの平和の道具として下さい」と。平和への道はないのです。平和そのものが道なのです。

〔追記〕

本翻訳は、北星学園大学特定研究費（プロジェクト研究）「平和学プログラムの高度化に関する調査研究」（研究代表者：萱野智篤経済学部教授）の研究成果の一部である。なお、本校脱稿日（2010年11月4日）の前日に、ケネス・ブラウン先生が亡くなられたという一報を米国から受けました。ここに心より追悼の意を表したいと思います。